

東京オリ・パラのホストタウンとして ルーマニアとドミニカ共和国を迎える 松戸市

松戸市は2016年12月、ルーマニアとドミニカ共和国のホストタウンとして政府から登録された。複数の国のホストタウンとなる例は千葉県ではほかにない。今年4月には市の総合政策部に専任スタッフ6名の「東京オリンピック・パラリンピック推進課」を置き、事前キャンプ地としての施設整備や市内外への広報活動を本格的に開始した。松戸市が2国のホストタウンとなるに至った背景と活動内容を紹介する。

◆おもてなしの文化が根づく

ホストタウンとしての松戸市の利点を「開催地の東京に隣接し、成田空港や羽田空港からも近いことが挙げられます。何よりも、地域で草の根の活動をしている市民の方々が積極的に海外との交流に取り組んでくれています」と、東京オリンピック・パラリンピック推進課・伊東朱美課長は説明する。松戸の地は旧下総国と武蔵国の境にあたり、平安時代の昔から交通の要衝で、江戸時代には松戸宿と小金宿という二つの宿場もあった。

「それだけにおもてなしの文化が根づいていて、二つの国から多くの種目の選手を招き入れる素地があるのです」

2015年7月、行政と地域が一体となった活動を進めるために「松戸市2020年東京オリンピック



■松戸市の訪問団が今年1月ドミニカへ。梨の苗木を贈り、植樹式が行われた

が「七草マラソン」を走り、翌17年にはタチアナ・ヨシベル駐日大使と本郷谷健次松戸市長も参加して2kmの部で完走した。

この年9月にはルーマニアからオリンピック委員やテレビ局など総勢12名の視察団が松戸市を訪れて運動施設などを視察。陸上、レスリング、卓球、フェンシング、水泳の5競技の事前キャンプ地とする覚書を交わした。続いて12月に「森のホール21（松戸市文化会館）でルーマニア・ブラショフ・フィルハーモニー交響楽団の演奏会が開催され、ローではルーマニアワインが振る舞われた。

今年1月にはルーマニアの陸上選手による市内の中学・高校の陸上部生徒のランニング教室、3月には女子レスリングチームと地元ジュニアチームとの交流会が開かれた。ホストタウンの招致に当初から携わっている推進課の三田村英俊課長補佐は「ルーマニアの方たちには書道や茶道など日本文化に



■上写真は2020年に向けて市が打ち出したスローガン「繋」松道（まつどう）。松道とは、松戸の道が世界とつながり、世界中の人々と祭典を祝い、感動を分かち合おうの意。下写真は機運醸成や対象国歓迎のために製作された関連グッズ、ボールペンとバッジ

ク・パラリンピック やさしいおもてなし推進（会議）が設置された。メンバーは市内4大学（聖徳大学、千葉大学園芸学部、日本大学松戸歯学部、流通経済大学）の学識経験者や松戸商工会議所、体育協会、観光協会など関連団体、市内企業（株セノ）や元バレーボール日本代表選手などのスポーツ関係者だ。

ルーマニアとの関係の始まりは、地元市民団体が同国の陸上選手を市の恒例行事「七草マラソン」に招待したことだった。またドミニカに青年海外協力隊員として20年近く滞在した松戸市民が、市の観

も触れてもらいました。子供たちと接する機会も多く設けています」と多様な交流が行われていることを強調する。

ドミニカはカリブ海の島国で、12年のロンドン五輪では陸上競技で金・銀メダルを獲得している。松戸市をホストタウンとすることが決まったのはソフトボールチームで、ほかにバレーボール、空手、テコンドーの選手たちも事前キャンプをする予定だ。「15年9月に松戸市と外務省の共催で開いた駐日外交団地方視察ツアーが最初の出会いです」と三田村課長補佐は振り返る。

「松戸市は『二十世紀』発祥の地でも知られる梨の名産地です。梨園に案内して試食してもらったところ、ドミニカの公使が、こんな甘くておいしい梨があるのかと感動して、松戸という土地も気に入ってくれました」

16年の6月から7月にかけて松戸市副市長と市議会議員、それに梨の専門家も同行してドミニカを訪れ、オリンピック委員会やソフトボール協会などを歴訪した。17年7月にはドミニカ出身の世界的バイオリニスト、アイシャ・シエドが松戸市議会議場で演奏を披露した。今年1月の2回目のドミニカ訪問では梨の苗を植樹するなど、農業での交流も広がっている。

◆友好関係を財産に

事前キャンプのベースキャンプ候補地は松戸運動公園で、これを機会に老朽化した施設をメンテナンスしていく予定だ。街なかの案内板などの外国語表記も増やしてホストタウンにふさわしい環境を整えていきたい。

光協会に属してドミニカ大使館との連絡係となり、ツイッターやYouTubeで活動状況を紹介するなどキーパーソンの一員として活躍している。「参加国・地域との人的・経済的・文化的な相互交流を図る」というホストタウンの趣旨にふさわしい行政と地域の連携といえるだろう。

◆2国との交流

ルーマニアはこれまで体操、フェンシング、ボート、水泳などの金メダリストを輩出している東欧のスポーツ強国だ。2016年1月に二人の陸上選手



■今年63回目を迎えた伝統の七草マラソンに、ルーマニア選手や大使が参加



■アイシャ・シエド（ドミニカ）のコンサート（上）と、ルーマニアワイン試飲会のようす（下）

伊東課長は「ホストタウンの認知度を高めるため、聖火リレーの誘致を目指し、今年からは地域のお祭りやイベントなどで『東京五輪音頭・2020』を流すなどいろいろなしなかけをしています」と話す。「東京五輪音頭・2020」は1964年東京五輪時の『東京五輪音頭』を元に一部歌詞を替えたもので、松戸市役所ではCDの貸し出しを始めた。ルーマニアとドミニカの国旗をあしらったバッジやホストタウンをPRするボールペンも製作し、記念品として配布している。

松戸市はホストタウンとしてだけでなく、陸上女子投てきの室伏由佳氏、車いすの中長距離の中山和美氏といったオリンピックやパラリンピック出場者による講演会を開催してきた。

「オリンピック・パラリンピックがより身近なものになり、市民のみなさんが日本だけでなく、ルーマニアやドミニカの応援もすること、友好関係が長く続くようになると思います。そのことが私たちの財産となっていきます」

ホストタウンとなったことを契機に、松戸市は2020年のさらには先を見据えた街の活性化につなげようとしている。